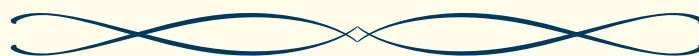


サイエントロジー、 社会科学、 そして宗教の定義



ジェームズ A. ベックフォード博士
社会学教授
イギリス、
ワーウィック大学

1980年12月

サイエントロジー、
社会科学、
そして宗教の定義



サイエントロジー、社会科学、
そして宗教の定義

目次

I.	機能主義的な定義	2
II.	実質的な定義	3
III.	結論	4

1980年12月

サイエントロジー、 社会科学、 そして宗教の定義



ジェームズ A. ベックフォード博士
社会学教授
イギリス、
ワーウィック大学

私のコメントは、何をもって宗教現象とするのかという分析を専門とする社会学者が、習慣的に用いる基準でサイエントロジーを評価した時、サイエントロジーを宗教と定義できるかどうか、という問いに向けられています。

社会学者によって採用されている宗教の概念と定義との間には、かなりの多様性が存在します。概念と定義の選択には、社会的な現実性の本質に関するさまざまな基礎的仮定、および宗教の概念化と定義付けの目的における多様性が反映されています。社会科学的な理解という、一般的に機械的な(認識的あるいは評価的とは異なる)特徴を鑑みると、概念と定義が、その真偽の観点からではなく、むしろ相対的な有用性の観点から判断されるというのは当然のことです。特に、ある現象を他の現象と区別させる差異的な能力(差異を示せる形で、それらに関する重要な事実を明確にする)、それが競合する定義と概念の有用性に対する主要な判断基準です。

したがって、当座の目的から見た場合、定義は変化します。しかし、これは完全に相対的、または無秩序な状態であるという意味ではありません。¹ 心理学者、社会学者、人類学者の間で使用される、宗教の定義に対する大まかな種類がふたつあります。それは機能主義的または実質的な種類です。それぞれの種類は、さらに細かい種類に分かれます。私は、サイエントロジストとの個人的な接触、サイエントロジーの教義、実践、組織、信奉者たちが得た結果の学術的な研究という観点から、サイ

1 文体上の理由から、私はもはや「概念化」について言及しませんが、それは分離可能な分析過程を確かに構成しています。分離可能な分析過程は、通常、現象を定義する過程に先行します。

エントロジーを宗教と定義付ける方が、他のどのような類いの事業と定義付けるよりも有用であると確信することを主張します。

I. 機能主義的な定義

機能主義的な定義は、社会的または文化的な実体の安定性および生存性に対する、未証明の現象によってもたらすとされる貢献に焦点を当てたものです。したがって現象は、個人から世界的なシステムに至るまで、実体にとって機能的であると示すことができます。物事に対するこのような定義の仕方は多くの哲学的な問題をもたらし、多くの論理学者たちを悩ませたという事実は、特に宗教との関連性において、社会科学者たちの間で人気を得る妨げにはなりませんでした。

宗教には機能主義的な能力があると言えるかもしれません。それは、

- (a) 個人的なレベルで、人格の不均衡、自己のアイデンティティー、人生の意味、道徳的理性などといった問題を人々が克服するのを助け、
- (b) 共同体レベルで、潜在的に社会に根を張っていない人々をグループや団体に統合する。そのグループや団体は、個人の人生に指導と意味を提供するとともに、大規模な社会において有益な基点を提供する。大規模な社会では、個人は、強力な官僚主義やシステムに対して脆弱であると感じるかもしれない。あるいは、
- (c) 社会的レベルでは、社会秩序を行き渡らせるための道理を提供し、貧困のままの人々に補償を提供し、主要な社会的機関同士の相互関係に対する道徳規制を提供する。

「セイタン」（精神的なビーイング）、「8つのダイナミックス」という精神の本質に関するサイエントロジーの基本的な教義、サイエントロジーのトレーニング・コースとカウンセリング・サービスの実践的な目標、そしてサイエントロジーの儀式にある威厳と思慮深さによって、サイエントロジーが（他の宗教と同じく）上記の各レベルにおいて実用的であるとの判断に私は納得させられました。これはもちろん、宗教だけがこれらの機能を有していると主張しているものではありません。それは単に次の主張にすぎません。第一に、サイエントロジーは他の宗教とそれらを**確かに**共有している。第二に、それらを満たす独特の方法は、外見と目的において、政治グループや福祉機関よりも、常識的に宗教と定義付けられるものの方に似ているということ。

機能という観点から宗教を定義することは、社会科学的分析のいくつかのケースにおいて役立つかもしれません。つまり、社会生活に対するそのさまざまな貢献という観点から光明が投げられる可能性があります。とはいえ、この視点から宗教とイデオロギーを明確に区別することは明らかに困難で

あることを鑑みると、機能主義的な定義は、宗教の特徴を強調する方向へはあまり大きく前進することができません。この理由から、実質的な定義の方が役に立つかもしれません。

II. 実質的な定義

パリンダー教授、ポコック教授、キャノン・ドゥルーリーのそれぞれが、実質的な意味における宗教として見なすことができる、現象の基準を提案したのは明らかです。つまり、「宗教」という用語の適用を他の現象と一緒に生じさせずに、明確な特性を示す現象に制限するための、さまざまな根拠を彼らが提示したということです。

実質的な定義の最も強い形態には、宗教は直観と内省によってのみ確信することができる本質、あるいは本質的な性質を持っていることが含まれています。したがって、ルドルフ・オットーは以下のように主張しました。宗教は、「それ自体の特殊性を純粹に把握する必要のある私たちの霊能的な本性であり、それ自体、それ以外の何ものからも説明を得ることはできない。」（『The Idea of the Holy (神聖という考え)』 Harmondsworth: Penguin Books, 1950年, 141ページ) 彼の意見では、宗教的経験の特異性は、あらゆる他の経験との根本的な違いにあります。すなわち、宗教的経験は、「完全に他の」経験でした。この種の推論にある循環性および永遠性という要素には問題があり、社会科学者のほとんどが本質主義の定義の利用をやめています。しかし、その誘引力は否定できません。

社会学者は、より頻繁に宗教の「規定的」な定義を使用する傾向があります。これはすなわち、彼らの目的のために、彼らの見解の普遍的な妥当性を主張することなく、「宗教」は特性を参照することにより、宗教として認識されることを意味します。例えば、人類学者M. スパイロにとって、宗教は「文化的に仮定された超人的存在との文化的パターンの相互作用からなる制度」です。（『Religion: problems of definition and explanation』[宗教：定義と説明の問題] M. バントン版）。しかし、すべての社会学者が「超人」に言及することを主張するわけではありません。別の人類学者P. ウォースリーは、宗教を「経験的-技術的領域を超えた次元」と定義することがより有用であると考えています。（『The Trumpet Shall Sound (角笛が響く)』 London: MacGibbon & Kee, 1957年, 311ページ) 実質的でありながら、かなり包括的な定義に対するこの選択は、多くの社会学者によって共有されています。よく知られている、権威的なR. ロバートソンによる定義は、例えば宗教的な文化とは、経験的現実と超経験的、超越的現実との区別に関連する…一連の信念と記号であると定めています。経験的な事柄は、非経験的なものよりも重要性において下位に來ます。

第二に、私たちは宗教的行為を単に、経験的/超経験的な区別を認めることによって形づくられた行動と定義します。（『The Sociological Interpretation of Religion (宗教の社会学的解釈)』 Oxford: Blackwell, 1970年, 47ページ)

規定的で実質的な定義の例をさらに追加しても目的を達することにはならないでしょう。というのも、引用された例は、社会科学的分析という目的のために宗教が定義される一般的な方法を代表しているからです。

スパイロの定義、ウォースリーの定義、ロバートソンの定義に暗示されている定義基準を用いると、サイエントロジーが社会科学的分析という目的において、宗教として認められることに疑いの余地はありません。人間に関してサイエントロジーが持つ根本的な哲学は、人間が物質的な身体と非物質的な精神の両方から構成されていると仮定しています。後者は、非経験的な領域で不滅の生活を楽しむとしています。セイタンの現実性を信じることは、サイエントロジーの儀式、実践的なトレーニング、カウンセリング・サービスおよび社会改革のプログラムに参加する上での論理的な前提条件です。非経験的で超越的な現実の存在と優越性に対する信念抜きに、宗教であるサイエントロジーはあり得ないでしょう。実際、最も権威的な社会学的分析の著者のサイエントロジーに対する見解によると、その運動の創設者およびリーダーは、セイタンの起源、前世の知識、そして「サイエントロジーの実践を通じて獲得できる超自然的な能力」に対する問題という方向により進行していました。(R. ワリス『The Road to Total Freedom (完全な自由への道)』London: Heinemann, 1976年, 124ページ)

献身的なサイエントロジストの行動は、経験的/超経験的な区別によって形成され、導かれるでしょう。パリンダー教授は、サイエントロジーの儀式が、非経験的現実に関する根本的な教えと調和する崇拝と畏敬の要素を、いかにして実現しているかを効果的に実証しました。ポコック教授は、サイエントロジーと、ヒンドゥー教や仏教の偉大な伝統との間にある神、または精神と人類との間にある内在的な関係について、それらに類似した理解という観点から明確な類似点を強調しました。

III. 結論

私の結論を述べますと、サイエントロジーは、信念、実践、組織構造においてクリスチャン教会、宗派、教派の大部分とは明らかに異なるものの、宗教と非宗教を区別するために社会学者が従来適用した基準を満たしています。

サイエントロジー宗教のための物質的基礎が、ビジネスのような方法で組織されているという事実は、その宗教としての地位には何の影響も与えません。芸術作品が販売または交換のために効率的に生産された場合、それが芸術品でなくなるでしょうか？どのような新しい宗教運動であっても、その活動のためにビジネスに則した物質的基礎なくして、現代世界で生き残ることができるかというのは浅はかです。キャノン・ドゥルーリーが指摘しているように、古代キリスト教の教会でさえ、今日では実際のメンバーと潜在的なメンバーに奉仕し続けるために、ビジネスに関する活動に

携わることに反対してはいません。相続した財産、恵与、後援、そして「生まれながらにして持っている会員資格」のない新しい宗教運動は、ビジネス的なやり方で活動しない限り減びてしまいます。

ジェームズ A. ベックフォード

1980年12月

著者について

ベックフォード教授は、1980年に「サイエントロジー、社会科学、そして宗教の定義」を著した時、ダーラム大学で社会学の上席講師でした。彼は現在、ウォーリック大学で社会学の教授を勤めています。

